

学び続け成長し続ける教員を養成 立命館大学教職大学院の魅力とは

立命館大学大学院教職研究科（教職大学院）は、2017年に西日本の私立大学単独としては初めての教職大学院として設立された。教育学部・学科を持たない立命館大学の教職大学院では、どういった研究と教員養成を行っているのか。2名の教授と3名の院生を迎えて座談会を開催し、その魅力と可能性を語ってもらった。

まとめ／宮本 猛 写真／行友重治

» 教育現場での成長をサポートする大学院

森田教授 本学の特徴は、「私立総合大学」ということと「教育学部がない」ということです。教育学部出身者の入学を大前提にしているわけではなく、様々な大学・学部出身の院生が集まり、学部時代の学びを伸ばすことを考えている教職大学院は、他にはあまりないのではないかと思います。そんな大学院に、皆さんが進学しようと思った理由やきっかけを教えてください。

森田 一番の理由は「院生講師制度」*です。現在は立命館大学の附属校である立命館小学校で院生講師として勤務しており、大学院の講義や実習だけではなく、実際の現場を2年間通して経験できることは貴重なことだと思っています。また、学部時代の教育実習は、どちらかというとお客様扱いで完成された学級の中に入れていただくところがありました。卒業後すぐ自分で担っていく

※「院生講師制度」…教職大学院の院生として在籍しながら、立命館大学の附属小・中・高で非常勤講師として働き、給与が支給される本学教職大学院独自の制度。大学院での修学に影響がないよう、担当する授業の時間割などが配慮されている。自治体での採用を目指す院生であっても、私立学校の先進的な教育現場で経験を積む大変貴重な機会となっている。

出演者

- ▶ **森田真樹氏**（大学院教職研究科 研究科長・教授）
- ▶ **菱田準子氏**（大学院教職研究科 教授）
- ▶ **中島健太さん**
（臨床教育コース、立命館大学経済学部経済学科出身）
- ▶ **森田菜月さん**
（教育方法・学習科学コース、大和大学教育学部教育学科出身）
- ▶ **小谷嘉孝さん**
（国際教育コース、滋賀県立彦根翔西館高等学校勤務）

と考えたときに不安もあり、さらに2年間大学院でしっかり勉強してから教壇に立ちたいと思いました。教員としての私には何度もチャンスがあるかもしれませんが、子どもたちにとってその学年はその一回しかないのです、より良い授業ができるようにと進学を決めました。

中島 このまま教員になっても、毎日の授業で手一杯になり、より良い授業をしていくための成長がなかなかできないのではないかと考えたのがきっかけです。現場に出る前に一度、教育についてしっかり勉強したいと考え、大学院への進学を決めました。

小谷 私は現職教員で、教職経験がそれなりにあるんですが、ここ数年自分の中で成長を感じられなくなっていました。これを打破するのにどうしたらいいかと思い、理論的なものがあまり自分の中になくことに気づいて、こちらで学びたいと思って入学しました。

» 現職教員と共に学ぶことのメリット

菱田教授 ここに入学して、「これが学べたな」「これは大いに役立っているな」と思うことはありますか？

小谷 職場では業務に追われて自分の担当教科のことしか考えられず、他の教科や学校運営に貢献するという発想があまりなかったんです。今では、学校全体を俯瞰して見られる視点が身につく、以前だったら「これは私には関係ないな」と思っていたことでも、今では「私にも何かできるかな」と考えるようになりました。

森田 私は大和大学の教育学部数学教育専攻出身なのですが、大学院では保健体育や社会など学部時代には学んだことのない教科を学んできた院生と関わったので、視野が広がったと思います。

中島 私は学内進学ですが、出身学部では教職の社会科を取っている学生は一握りでした。ここでは「教育現場に立ちたい」という強い思いを持って集まってきている人たちと学ぶことができ、大きな刺激を受けています。

森田教授 本学教職大学院では、必ず実務家教員と研究者教員の2人で1人の院生を指導するシステムにしています。また、共通科目も含めて、ほぼ全ての科目をストレートマスター（学部卒院生。以下、ストマス）と現職の院生と一緒に学べるように制度設計をしているのですが、ストマスのお2人はどのように思われますか？

森田 どの授業でも必ず現職の先生が1人以上入るようにグループ分けされていて、現職の先生による現場での事例をもとに、その先生を交えてディスカッションできたのが勉強になりました。

中島 同じ院生として学び合っていくという点において、入学前に想像していた現職の院生とストマスとの壁もな

多様な学部出身者・現職教員。
ダイバーシティな学びの
環境での大きな成長がある。

▶ **森田真樹氏**
（大学院教職研究科 研究科長）



いのかなと感じました。

森田教授 菱田先生は本学の教員になる前に大阪市の教員や教育委員会の役職をされていて、その時に大学院に行かれていますよね。現職の先生が大学院で学ぶ意味について、どのようにお考えですか？

菱田教授 以前は現場経験を踏んでこそ、と考えていました。ですが、今は大学院で学ぶべきだとはっきり言えます。教師のキャリアステージと言いますか、これまでの自分の教育実践を振り返ったときに、「自分が本当にしたいことは何か」と考える時があると思います。こういう節目に教職大学院で学ぶことは、その後の教員人生を考えると大きいことだと思います。

森田教授 小谷さんはストマスの院生と一緒に学ぶことで気付かされたことなどありますか。

小谷 教育に対する意欲はもちろん、学んだことをすぐに活かしていこうという姿勢も勉強になり、彼らから学ぶことが多かったですね。「自分も頑張らなければ」と刺激を受けました。あと、ストマスの人たちに対しては、「現職の経験を伝えたい」というより、院生同士「一緒に学んで考えたい」と思っていて、そうしたなかで、ストマスの人たちの役に立てていたらうれしいですね。

院生講師として働くことで、
学びながら教員として
現場も経験できる。

▶ **森田菜月さん**
（教育方法・学習科学コース、大和大学教育学部教育学科出身）



院生講師として勤務する立命館小学校で教壇に立つ森田さん。
右の写真は手作りの教材。



成長し学び続ける教師で
あるために、院生とともに
学び合える場所

▶ 小谷嘉孝さん
(国際教育コース、滋賀県立彦根翔西館高等学校勤務)

» 緩やかな3つのコース選択

森田教授 本学教職大学院は緩やかなコース制をとっており、入学後に「臨床教育」「教育方法・学習科学」「国際教育」の3つのコースから選べるシステムになっています。それぞれのコースを選んだ理由をお話いただけますか？

中島 私は、学級経営について研究したいと思っています。子どもたちにとって毎日過ごす場所は学級です。その学級を良くしていくためには…という視点に重点を置き、子ども一人一人について考えていくために「臨床教育コース」を選択しました。

森田 一番大切にしたいのは教科指導だったので、「教育方法・学習科学コース」を選択しました。ただコース共通の授業もたくさんありますし、他コースの授業も受講できるので、コースが違っても院生同士の交流があり、そのなかで新しい発見があったり刺激をもらうことで、日々自分が成長できていると実感しています。

小谷 「国際教育コース」を選択しました。以前は「国際」



小谷さんが作成し、勤務校で発行している「S3通信」。SDGsについての解説や教科にどうSDGsを盛り込むか提案を行っている。

というと、単に外国のことだと思っていて、生徒からすると身近に感じられないかなという印象がありましたが、教職大学院の授業を受けていく中で、自分たちにとって「非常に身近なことなんだ」と実感することができました。学校は社会とつながっていて、その社会は世界とつながっているのです。SDGsなどを通してそうしたことを伝えられる授業をしていきたいと思っています。

森田教授 「国際教育コース」は本学教職大学院の特徴的なコースですが、皆さんにとってどう役に立っていますか。森田さん、中島さん、いかがでしょうか。

森田 立命館は海外に出ていく児童・生徒・学生も多いので、いずれは今教えている小学生が海外に飛び立っていくんだな…と思うと、国際教育の授業と彼らの将来がつながっていると感じます。

中島 英語や海外の話だけでなく、身近な話から「自分と世界はつながっている」という視点がなかったのです。そうした考え方を得ることができたのは大きかったです。

森田教授 みなさんの研究テーマについて紹介してもら



連携協力校での実習で授業する中島さん。板書だけでなく、電子機器を使って授業に工夫をこらす。

先生方と院生の
距離感が近く、
何でも相談しやすい。

▶ 中島健太さん
(臨床教育コース、立命館大学経済学部経済学科出身)



えますか？

小谷 『SDGsで教科と教科、学校と社会を横断する』というのを考えています。SDGsはもともと社会とつながっているものですから、社会の中での課題解決に卒業後も活かしていけるのではないかと思います。

森田 『算数の文章題において図式化する力を育てる授業実践』に取り組んでいます。学部時代の実習で「算数は好きだけど数学は嫌い」という子どもが多く、なぜだろうと。ところが、院生講師の現場で小学生を見ていると「算数の基礎ができていないな」と気づき、算数を数学を解くための道具として使える力を身につけるために、まずは問題文を自分の図(絵・線分図・表など)に落とし込み、正しく立式する授業実践をしています。

中島 『聞き合う関係の構築による学級経営』というテーマで学んでいます。きっかけは、学部生の教育実習で中学1年生を担当し、大学院1年生の実習では中学2年生を担当する中で、1年生は授業に前向きに参加してくれるのに、2年生は自分を発信することに消極的な部分が見られました。お互いを受容し合うような「聞き合う関係」を作れば、それが解決できるのではと考え、研究テーマにしました。

» 充実した実習と丁寧な振り返り

森田教授 本学教職大学院では、大学院1年生の夏休みに3週間の実習に行き、後期のゼミで実習の振り返りをして深めた上で、2年生の4月から7週間の実習に行くという「理論と実践を往還・融合させる」カリキュラムを組んでいます。菱田先生は、現場におられた経験から、学部のとくに3~4週間の実習だけで現場に出ると、どのあたりが違ってくると思われますか？

菱田教授 1年生の3週間の実習が終わってから、2年生の7週間の実習までの間に基本的な理論をゼミや授業で身につけることが、とても大きいと思います。一つ一つの実践や、日々やっていることを振り返る時間がちゃんと保証されているのが本学教職大学院の学びです。そのことが自信になり、ベースとなるものをちゃんと大学院で学んでいるから、現場に出てもいろいろなことに対応できるのではないのでしょうか。

森田教授 実習先における本学教職大学院生の評価はい

「答え」のない時代を
生きるための「教育」「学び」
とは何かを教えていきたい。

▶ 菱田準子氏
(大学院教職研究科 教授)



かがでしょうか。

菱田教授 「立命館の院生は誠実で一生懸命頑張る」とよく仰っていただきます。京都府・京都市、滋賀県、大阪府・大阪市と連携していて、院生は基本的に自分が受けた自治体の実習に行くんですが、実習の段階から立命館の院生を将来の同僚として見てくれていて、後輩を育てようという意識で関わっていただいています。あと、例えば院生が授業でタブレットを使ったり、臨床的な方法を現場に持ち込んだりすることで、学校に新しい風が吹くというか、そうしたところも評価していただいていると思います。

森田教授 森田さんは院生講師として立命館小学校で勤務していますが、勤務以外の時間に大学院での実習もしていますね。

森田 実習も同じく立命館小学校で実施しています。昨年度も一年を通して現場にいたので、先生方の動きや一年の流れがわかる状態で研修にも参加できたことは、学校・学年スタッフの一員として所属意識やより強い責任感を持たせたことがとても良かったと思っています。

森田教授 充実した実習は本学教職大学院の魅力の一つですが、これ以外に「これから教職大学院を受験しよう」とか、「立命館の教職大学院に進学したい」と思っている方にアピールできる魅力を教えてください。

中島 一つ挙げるのであれば「関係性」かなと思っています。院生同士もそうですし、先生方と院生の関係性というのも距離感が近くて、別のゼミの先生であっても相談がしやすいですし、ちょっとした研究や授業のことを気軽に相談できる関係性があるのがいいと思います。

森田 私は、「院生講師制度」が進学の決めてでした。院生講師になるには書類選考と面接がありますが、日々子どもたちと関わる中で授業を構想できるため、自身の



研究において非常に役立っています。困ったら大学院に戻ってきて理論と結び付け、学んだことを「明日の授業で早速使ってみよう」と実践できるのは、貴重な経験です。あと、立命館大学には教育学部がない分、様々な学部から集まってくる教科の専門性が高い院生が多いと思います。情報系や理工系学部出身の院生と数学について話し合っていると、思っていなかった発想に出会えたり、授業づくりで大きな刺激をもらえたりします。

» 「答え」のない時代の教員力とは

森田教授 新型コロナウイルスの影響で、皆さん方が1年生の最初の半年間は対面で授業ができず、キャンパスも閉鎖になってしまったんですね。だからわれわれもZoomを使いながらオンラインで授業をしていたのですが、何か影響はありましたか？

中島 今年度実習に行ったのですが、緊急事態宣言が出てしまって、研究テーマに関するグループワークができなくなってしまいました。その中でもより良い学びをと考え、ペアワークを基準にして、本来考えていたものとは少し違った形で実践しました。

森田教授 中島さんのように、現場の状況が変わったらそれに合わせてどうテーマを修正するか…ということも大事なことだと思います。こういう研究の仕方みたいなのは、実務経験のある先生から見えていかがですか？

菱田教授 当初計画していたことができない場面って、やっぱり相当あるんですよね。そのたびに何と言うか…鍛えられている感じがします。そこで終わるんじゃなくて、その中でもできることを自分で探し出す力だとか、そういうスキルがこの2年間でついてきていると実感します。

小谷 そう言えば、院生の皆さんと話し合ったり意見を

出したりした後で、最後に答えが出ない授業が多かったんです。実際に学校で指導しているときは、答えが最初にあってそれをどう教えるか…という形では授業を組んでいるんですけど、「答えがない」というのも逆にすごくリアルなことだし、これからの社会は答えがないことが多くなってくると思うので、それを考えていく姿勢や、考え方が大事なんだなと思いました。

菱田教授 そう、これからの時代って「答え」がないですよ。今何が起こるか分からない、「これができなかったときに次はどうする？」というときに経験値だけで何かをするのではなく、そこに根拠となる理論を学べるのが大学院ではないでしょうか。

森田教授 「教育方法・学習科学コース」の必修科目の中に、ICTの授業を1つ入れています。大学のタブレットを1人1台使いながら、「学校でICTにどう対応するか」という視点だけではなく、教職大学院の講義自体もICT化していく必要があると考えています。ICT活用についてはいかがですか？

森田 附属校のICTは充実していて、電子黒板やプロジェクターなどは子どもたちも操作できます。私はいま5・6年生を受け持っているのですが、6年生の子が大人顔負けのPowerPointを作って、1年生の子に「登下校のマナーはこうだよ」とプレゼンをしている姿を見ると、「ここまでできるんだ」と思うと共に、私自身ももっとICTの力をつけていきたいと思いました。

» 教員としての土台を作り視野を広げる大学院

森田教授 将来こういう教員になりたいというビジョンをお持ちですか？

中島 全ての子どもを見捨てない教員でありたいと考え



院生自習室
自習スペースは院生ごとに与えられ、落ち着いた環境で学修することができる。



教職研究科共同研究室
他コースの院生や、ストレートマスターと現職の先生との交流の場でもある。



教職研究科デジタルラボ
電子ボードやBIGPADを使ったICT教育の実践を経験することができる。

ています。特に支援を要する子やグレーゾーンの子は、学級から浮いてしまったり、最初の段階で授業へのしんどさを覚えてしまったりするケースがあり、中学校でそういう感覚を持ってしまうと、その後の人生に影響を及ぼすこともあると思うんです。そこをケアしながら他の子どもも学びを深められるような授業や学級づくりができる教員でありたいと思います。

小谷 今回の大学院での学びを、私だけに留めておくのはもったいないと思うので、他の先生方に何がしかの形で還元していきたいですし、学校がうまく回るように何か貢献できたらと思っています。

森田 授業力を一番に考えています。小学校教員を希望していますが、特に算数・数学の専門性を活かして小学生に指導していきたいと思っています。また、大学院を修了しても、研究を続け、生涯成長し続けられる教員でありたいと思います。

森田教授 教職を目指す学生は、学部の4年生のときに進路で悩むことが多いと思います。「どういう進路で教員になろうか」と迷っている学生たちに対して、教職大学院の良いところを教えてください。

森田 私は立命館大学の教職大学院に進学したことで、附属校で研修と勤務をするという貴重な経験ができ、今は私立学校に勤めたいという思いになりました。将来の

進路に対する視野や可能性を広げるという意味でも、教職大学院への進学は大変意義が大きかったと思います。
中島 教職大学院に進学することで、現場に出るのが2年ほど遅くなりますが、実際に教職大学院で学んでみて、教員としての姿勢や視点といったこれからの教員人生の土台を作ることができているのではないかと感じているので、この2年で学んで得たものを持って現場に出るメリッの大きさを感じています。

小谷 今まで、物事に対する考え方や研究・勉強といったことについて、深く省みる、振り返るということがあまりなかったんですね。ここに来てから初めてそのことに気づきました。現場に戻っても、研究や勉強で自らを高めていきたいと考えています。

森田教授 立命館大学の教職大学院には、皆さんのように多様な院生が集まっており、その相乗効果もあって他の教職大学院にはない学びを提供できていると確信しています。教職大学院への進学を迷っている学生の皆さんには、勇気を出してぜひ一歩を踏み出してほしいと思います。入学してみたら、きっと「良かった」と思ってもらえるはずですし、教職大学院を修了することで、その後の教師人生が大きく変わると思います。本日は皆さん、ありがとうございました。

**立命館大学大学院教職研究科
オンライン入試説明会開催**
10/16(土)・12/18(土)
14:00-15:00
事前予約はこちらから >>>

2022年4月入学 入学試験日程	
入試方式：一般・社会人・学内進学	
試験日	出願期間
2021年 9月12日(日)	2021年8月4日(水)～8月25日(水)
2021年11月21日(日)	2021年10月20日(水)～11月4日(木)
2022年 2月 6日(日)	2022年1月5日(水)～1月19日(水)

11/8(月) からの2週間は大学院の授業に触れられる「大学院ウィーク」も開催!!

学部新卒院生の一週間

立命館大学文学部人文学科日本史学専攻出身 ▶ 〈2年生〉 中小路 貴輝さん

» 大学院に進んだ理由

学部の4年間だけでは教師として力不足であると感じていたためです。学部時代から教師を目指していましたが、このままでいいのかという漠然とした不安がありました。より専門的に教育を学び、自分に何が足りないかを見極めるために大学院へ進学しました。



中小路 貴輝さんの一週間

月

私は大学院生講師という制度を用いて、午前中は立命館の附属校で高校日本史・世界史の授業をし、午後は大学院で講義を受けています。現在、2年生ですが、平日は基本このような生活スタイルです。院生講師制度は毎月お給料もいただけるので助かっています。

大学院の授業は全科目14:40以降に設定されており、講師を務めるのに不都合がない制度となっています。20時まで大学院の講義を受け、その後、次の日の授業準備と、その日の講義で出た課題をこなします。22時半ごろに帰宅し、24時前に就寝です。

火

附属校で1.3限に授業をし、隙間時間で授業準備や他の先生の授業を見に行かせて頂いたりしています。大学院の講義は6限のみで、それまでの時間は課題をしたり、参考文献を探したり、火曜日は比較的時間があまる日なので、自身の研究テーマ「歴史的思考力」に関連する文献を探したりします。

水

水曜の午前中は、大学院のフィールドワークが設定されています。独自の取組をしている学校に訪れ、実際に現場の様子を見ます。リアルな現場を垣間見ることは自身の研究にとって大変参考となるもので、大学院に戻って他の院生や教授とディスカッションし、自身の研究に活かします。その後、講義を20時まで受け、次の日の授業準備やその日の課題を終わらせます。普段は忙しいので、課題をその日中に終わらせるのがモットーです。

木

この日は唯一、午後にも附属校での授業を受け持っています。そのため、お昼休みは、担当教科の先輩教員と授業の打ち合わせをします。

大学院での講義の後、22時半ごろまで授業準備と課題をします。この日は大学の講義が1つ少ないので、空いた時間でテスト作成や、研究について教授に相談に伺ったりします。

金

金曜日は、附属校の授業が1.2限のみなので、早めに大学院に行きます。そこで他の院生と情報交換をしたり、「こんな授業実践はどうだろうか」という相談をしたりします。午後は20時まで講義があり、その後は課題をこなします。次の日は休日なので、少し遅い時間まで、自習室で授業準備や研究テーマに関連することを行ったり、あるいは早めに帰り学部時代の友人とオンラインで話したりします。

土日

土曜日は附属校での勤務も大学院の講義もないので、買い物に行ったり、趣味に没頭したりします。附属校のテスト前や学期末になると、土曜日でも出勤して準備をするときもあります。夜は友人とオンラインでゲームをしたりして、リフレッシュに使っています。院生だからと言って、勉強ばかりをしているわけではありません。また、休日には、寺社や史跡を訪れて教材に幅を持たせる取組をしています。

現職教員院生の一週間

京都市立桂中学校 国語科教員 ▶ 〈1年生〉 山口さやかさん

» 大学院に進んだ理由

教育現場で働いていた時から、様々な書籍を読んだり、企業主催の教育関係のフォーラムに自主参加したりしてきましたが、個人の努力だけでは知識にも偏りが生じると考えていました。周囲の先輩方の勧めもあり、知識を系統立て自分の専門性を高めるためにも、大学院進学を決意しました。



山口さんの一週間

月

同級生にはストレートマスターだけでなく、様々な年齢の現職の教職員の方がいらっしゃいます。授業では様々な組み合わせのグループワークがあるので、ストレートマスターも現職教職員も混ざって色々な協議をします。徐々に皆と打ち解け、年齢性別関係なく話せる間柄になってきます。



火

大学院の授業がない日を設けました。異なるキャンパスに赴いて、学部の教職課程の授業内容について学部生にヒアリングしたり、大学院の教授に質問をしたりする日にしています。火曜日は少し余裕があるので一週間のスケジュールを見直す、レポートを書く、書籍や論文を読むことを中心に過ごしています。思っていた以上にレポート作成や、準備しなくてはいけない内容と量の把握が上手いかず、生活のリズムやスケジュールを調整したりして、落ち着くまでに2か月かかりました。

水

フィールドワークに出かけることが多い曜日です。現場で働いているとなかなか見ることができない、他の学校や私学の取組を実際に見ることができ、大きな学びがあります。午後からは授業の無い隙間時間を利用して、同じ教科を専攻している大学院の同級生と自主的に集まり、勉強会（自主ゼミ）を行っています。



木

授業が始まるまでに、誰かの声掛けで、都合のつく人が集まって、あるテーマについて考えた資料を交換したりなど、全体で交流する自主研修をすることがあります。授業とはまた違った雰囲気ですごくばらばらに楽しく取り組みます。

授業後も、授業テーマについて話し込む院生の姿がチラホラ。院生自習室には集中できる雰囲気と各自のデスクがありますが、キャンパス内の様々なところに机があるので、合った環境を見つけて遅くまで残って学習している院生もいます。

金

午前中は自主的にフィールドワークへ。承諾していただいた先生の授業や、紹介してもらった施設など見学に行き知見を広めています。午後は人間の心理が作り出す様々な社会問題を、深く考察する授業があります。視野を広く持ち、問題の本質と適切な支援の方法について理解することなしに新たな解決への糸口は見つからないと思います。未来の社会を生きる子ども達に必要な視点です。こういった視点や考え方に個人でたどり着けるのは大学院ならではの視点です。

土日

ほとんどレポートを作成したり、調べ物をしたりしています。現在の学習関連の動画や映画を見ることも。または同僚や友達と今学んでいる内容の意見交流をして学びを深めています。大学ではなかなか借りられない本を地域の図書館に予約して借りに行くこともあります。

レポート作成に余裕のある時は、映画を見たりお茶を飲みに行ったり買い物に出る等、仕事をしている時と同様、リフレッシュすることを心掛けています。